

武漢事務所便り週間新聞記事報告 2010.11.06-2010.11.12 26号

2010年11月6日付け「大楚ネット」により

薬の自動販売機が市内の街頭に登場

昨日、24時間稼働薬の自動販売機が解放大道に登場し、多くの市民の注目を集めた。

漢口解放大道体育館の斜向いにある「健康人薬局」の前に、同薬局によって設置された薬の自動販売機は市民の関心を集めた。多くの市民は紙幣やコインを投入して、ドキドキしながら試していた。これは武漢市で初めての街頭に設置された薬の自動販売機である。

1分も経たないうちに、自動販売機から「胃腸薬」が落ちてきて、それを取り出した張さんは「操作方法はATM機でお金を下ろすのとほぼ同じで、これからは夜中でも薬を買うことができ、さらに便利になる」と語った。

この24時間自動販売機にはコイン投入口、薬の取り出し口、釣銭口がつき、中に200種類以上の常備薬があり、価格は100元(約1300円、1元=13円で計算)以内である。現金を入れ、画面に従って操作すれば必要な薬を購入でき、価格は薬局と変わらない。30分以内に10名を越す市民が自動販売機を利用した。

健康人薬局の責任者である孔心亮氏は「この自動販売機の価格は10万元(約130万元)以上であり、街頭に設置されるのは武漢初である」と話した。



武漢初の自動薬販売機

2010年11月6日付け「楚店都市新聞」により

万博の「湖北館」が潜江市に移転予定

湖北省万博弁公室によると、湖北省政府の許可を得て、湖北館が上海万博から撤退した後、潜江市に再建設されることになった。これで宜昌市、随州市、潜江市及び武漢市東西湖区による湖北館「争奪戦」が終結した。

今年9月、宜昌市、随州市、潜江市及び武漢市東西湖区はそれぞれ人員を派遣し、上海万博の湖北館について現地調査を行い、湖北省万博弁公室に湖北館の受け入れを正式文書で申請していた。

潜江市は別名「水郷庭園」と呼ばれ、湖北館が表現した都市発展の理念と一致しているため、再建設の場所として選ばれた。

湖北館は都市発展の歴史、美しい願い及び水と水とのつながり、人と水が寄り添い、都市と水が融合する知恵と理念をテーマとしている。潜江市は市内の「潜水」という川の一部が漢水に流れ込み長江に合流することから名付けられ、古くから「雲夢沢」の一部である。市内には湖がまるで星のように散らばっており、川が都市の中を縦横に流れていることから、水と縁は切っても切れない都市である。湖北館全体を潜江市に移動することにより、湖北館の「水」の理念が引き継がれ、さらに高まることだろう。